

水澤利忠博士を偲ぶ

―『史記会注考證校補』のこと―

青木 五郎

長年にわたって本学会の理事として、また、平成二年度から平成五年度までは、会長として学会を統管し、われわれ後学を導いてくださった水澤利忠先生は、昨年十二月二十九日に長逝されました。二十余年に及ぶ闘病生活でしたが、病床では終始明るく振舞われ、九十五歳の天寿を全うされました。その生きざまは誠に見事なものでした。

先生は史記の研究者として、その名を国の内外に馳せておられますが、先生と史記との出会いは、東京文理科大学卒業後、竹田復博士の主催する史記の研究会に、特別研究生として参加されたことに始まると仄聞しています。その研究会で、史記の諸本を対校する任に当たられた先生は、文字通りの東奔西走、史記に関する資料を全国の図書館・文庫、神社仏閣を訪ねて渉獵されたのですが、採訪された個所は二十数ヶ所、調査・収集された資料は四十数種に及ぶと聞いています。後年、これらの資料をもとに『史記会

注考證校補』全九巻を完成し、昭和三十七年に、「史記之文献学的研究」の論文を以て、文学博士の学位を授与されました。『校補』刊行後も、『史記桃源抄の研究』全五冊、『史記正義の研究』、『(国宝南化本) 史記』全十二巻、『史記列伝』訳注(一)(二)(三)(新釈漢文大系)などの大著を、相次いで刊行されました。その赫々たる業績は、東京教育大学(非常勤講師)、巢鴨高等学校(専任講師)、群馬工業高等専門学校(名誉教授)、群馬県立女子大学(名誉教授)、文教大学(教授)での教育業績と相俟って、平成四年には、勲三等瑞宝章の榮譽に輝かれました。

上述の如く、先生は一貫して史記研究に生涯を捧げてこられたのですが、本稿では先生が最も心血を注がれた大著『史記会注考證校補』のお仕事を回顧しつつ、在りし日の先生をお偲びしたいと思います。

*

*

*

昭和三十二年、東京教育大学に入学して間もない頃、先輩から誘われて、当時非常勤講師として史記を講じておられた先生の『校補』のお仕事を手伝うことになったのが、先生の知遇を得た始まりでした。

当初、私に与えられた仕事は、滝川亀太郎博士の『史記会注考證』と宋版の景祐監本とを、正文・注文にわたって対校しその異同を書き留める、ということでした。学寮の暗い電灯の下で、睡魔に襲われながら、くる日もくる日も、無味乾燥とも思える文字のつき合わせに精を出していたのを憶えています。田舎からポツと出の学生に、先生の研究の意義など理解すべくもなかったのですが、それでも心のどこかに「学問」の端くれにつながっているのかも知れない、という充足感がないでもありませんでした。

夏休みに入ると、同じく先生の仕事を手伝っていた先輩や同輩たちと、先生の板橋のご自宅に寝泊りする生活が始まりました。もちろんクーラーなどはない時代ですから、われわれは毎日水屋さんから運ばせた氷柱をたらいにいれて涼をとりながら、氷柱を囲んで『会注考證』の輪読や『校補』の校勘に精を出したものでした。夜の十時になると、先生はわれわれ郎党どもを引き連れて近くの銭湯で汗を流し、冷たいビールを振舞ってくださいさるというのが日課

でしたが、われわれはその二階を梁山泊と呼んで気取っていました。

当時、先生のご両親はご健在で、父上は北海道の小学校長を定年退職して上京し、同じ板橋の家で学習塾を開きながら、物心両面で先生の研究を支えておられました。朝食は毎朝母上が作ってくださいました。味噌汁と目ざしの、いわゆる一汁一菜の質素なものでしたが、それでも美味しいと言わないと機嫌が悪いんだ、と先生は冗談まじりに仰言っていました。父上は昭和三十四年に、『校補』の完成を見ることなくお亡くなりになりました。後年、先生は『校補』巻八の研究篇の扉に、次のような献詞を題されています。

朝夕 この研究をはげまし給い 完成の日を待ちわび給
う

きさらぎの 或る雪の降る朝 ただ一言の 別れのこと
ばもなしに

突如 身まかり給うた 今は亡き父上のみ霊に捧ぐ
みとせの後の その日の朝 利忠しるす

格調高いこの文章を一読して、先生の感謝と無念の思いが、こもこも心に泌みわたったことを覚えていきます。

* * *

その頃、われわれ学生にまじって、先生の史記の講義を熱心に聴講している一人の妙齡の婦人の姿がありました。

それが先生のご令閨、澄子夫人だとわかるのに、それほど時間はかかりませんでした。奥様は先生のお仕事の最もよき理解者で、ご結婚以来、育児の傍ら先生の訪書旅行にも同行して調査・校合に当たられるなど、内助の功を尽くされました。先生の恩師である内野熊一郎博士は「史記会注考證校補彙報」に、次のような逸話を載せられています。

一昨年、春も葉桜になった或る日曜、「ご免ください」と、甘いしとやかな女性の声に、首をかたぶけ玄関に出してみると、水澤学士が清艶な同夫人・令嬢とニッコリ立っている。仙台・米澤での書き入レ筆写を終えて、大きく一と抱えもの筆写原稿を、見せに来てくれたのである。嬉しさうである。「これで完了?」、「ハイ」と婦人が答へる。一寸異様に思えて、「あなたもご一しよに?」、「ハイ、手助けに……」と、うなずいた。「ホウ……」と私は、思はず両人の顔を見つめて、感入したことである。なるほど、これほどの大部の筆写が、十日やそこらで、ただ一人の力で出来る筈はない。学士の正義佚文補輯の大労作には、実にその蔭に、こうした美しい内助の花が、咲きそうだったのである（「推薦のことば」）。

若き日の先生ご夫妻の琴瑟相和したご精励ぶり、それを頼もしげに見守る慈父のごとき恩師の暖かいまなざしが、彷彿とする一齣です。

* * *

右のように、澄子夫人をはじめとされるご家族、受業生の助力はもちろんのこと、先学の諸先生方のご指導、文部省の助成や財界の後援などによって、昭和三十二年には、『校補』の第一・第二巻が刊行されました。先生が史記の研究を始められてから、十年近い歳月が経っています。滝川亀太郎博士畢生の著作『史記会注考證』の史記のテキストとしての優秀性を顕彰するために、博士未見の諸資料を博搜・対校して、『考證』をより完整なるものとして世に問おうとする、先生の壮大な意図が具体的な姿を現わし始めたのです。巻頭の「校補資料一覧」（史記古鈔本以下七十余種）を瞥見しただけでも、その該博さに驚嘆させられます。板本との校讎一つをとってみても、周知のように、史記の正文は五十余万字、これに集解、索隱、正義の三家注を加えれば、その文字数は推して知るべきです。それらを全て二十数種について逐一対校しようとするのですから、気の遠くなるような話ですが、先生はそれを敢行されたのでした。『校補』刊行に先立って発刊された「彙報」

で、一貫してこの研究を指導してこられた竹田復博士は、

水澤君がよくこれらの膨大な資料を幾度かの長期に亘る訪書旅行によって調査することができたのは、偏に各方面の支援鞭撻の熱情の賜物であるが、また同君の不撓不屈、終始一貫せる学的良心によって始めて能くなし得たことであり、ただ敬服に堪えない。

と、その成果を心より喜ばれ、諸橋轍次博士も同じ「彙報」で、

思ふに乾嘉の学風が成に伝わってから、明治の中葉以後校勘に力めたるものは尠くない。然かも一書に就て此程までに精緻を極めて徹底を期したものは他に類を見ない。

と、その先学未踏の壮举を称えておられます。

* * *

先生の『校補』は、その後「史記之文献学的研究」という六三〇頁に及ぶ大論文とともに、全九巻として完結しますが、この『校補』並びに論文に対する全面的かつ周到な評価は、澤谷昭次氏に「水澤利忠の『史記会注考證校補』」（『史学雑誌』七二一九）と題するすぐれた論考がありますので、そちらに譲るとして、私は中国における本書の評価について、その一端を紹介して責めを塞ぎたいと思

います。

中国において滝川博士の『考證』が、三家注以後の中日両国の研究成果を集大成したものと高く評価され、かつて五十年代に北京古籍出版社から影印出版されましたが、その後も大陸・台湾双方から、何度か縮印本が出版され、二〇〇九年には新世界出版社から全十四冊として出版されています。また、『校補』については、七十年代に台湾の広文书局から影印出版されましたが、この両者を併せて縮影されたものが、一九八六年に上海古籍出版社から、上下の両巨冊として出版され、史記研究者の渴望を癒すものとして斯界の迎えるところとなったのでした。その巻頭に掲げられた「出版説明」は『考證』『校補』に対する当時の中国学界の評価を反映するものと考えられますので、その一部を紹介させていただきます。（『考證』に関する部分は、紙面の都合で割愛いたします）。

『考證』は多くの書を参照して校定しているが、校記を作らず直接改訂・増補している。その後、水澤利忠は五十年代に『史記会注考證校補』を著して、その欠を補った。『校補』は『考證』を底本とし、広く衆本を対校すること三十余種に及び、その他、中日の校記資料四十

種近くを参考にしている。その中には、宋本八種、元本二種、日本の古本四種、燉煌写本残卷三種、日本古鈔本残卷十數種などが含まれており、現在の板本もほとんど網羅されている。

『校補』では、『考證』で省略された『正義』佚文の出所を一々明記しており、また、二十餘種の日本古鈔本校記等の資料によって、新たに『正義』佚文二百余条を増輯している。その中には、亡佚した古籍の文章もいく分か含まれているし、『考證』の三家注移録時の錯誤も訂正されている。

『校補』の特徴は校本が多い点にある。従前、『史記』の校記としては、清の張文虎の『校刊史記集解索隱正義札記』が最良のもので、現行の標点本はこれによって校訂している。水澤は『札記』を全面的に参照した上で、更に張氏未見の宋代唯一の三家注合刻本の黃善夫本、及びわが国の蔵書目録に今まで著録されなかった南宋紹興十年刊の大字集解本をも校勘している。日本の古鈔本、並びに古本校記に至っては、張氏はなおさら目にすることができなかつたものである。したがって、『校補』の資料は『札記』に比べてはるかに貴重なものであり、同時に標点本の不備を補うものでもある。

『校補』は同一系統の版本に対して、主次を分たず逐一収録している。この点について作者は「自序」の中で弁明はしているが、やはり繁瑣の嫌いは免れない。校記も異同を羅列したものが多く、是非を弁じたものがないのは、明らかにその欠点である。数は少ないが、通仮字、異体字の校録は不必要である。しかし、『校補』はあらゆる版本を網羅しており、したがって古本『史記』と三家注の本来の姿をほぼ窮い知ることができ、後世の武英殿本、金陵書局本、標点本等の通行本の得失を考察する上でも、重視するに値する校勘の書であり、『考證』と補完し合う著作といえよう。

引用が長くなりましたが、右の文は、『校補』の校讎資料について若干の誤認はあるものの、『校補』の特長については、概ね正しく扱えられているようです。ただ、『校補』を張文虎の『札記』に比べてはるかに貴重だとする評価は、現在中国においては張文虎校訂の金陵書局本を底本とする評点本（中華書局刊）が最も善本とされ、近年相次いで出版された史記の訳注がいずれも評点本によっていることから考えると、随分思い切った発言のようにもみえますが、九〇年に出版された張新科氏の『史記研究史略』

も、ほぼ同様の評価を与えていることから考えますと、今日の中国の史記学界における共通の認識を示しているといつてよいでしょう。

後半の『校補』批判は次の二点からなされています。

(1) 同一系統のテキストについては、繁瑣にわたるのを逐一収録する必要はない。

(2) 異同の羅列が多く、異同の是非を論じたものが少ない。

というのがそれです。「出版説明」の筆者も触れているように、こうした批判に対する水澤先生の立場は、すでに先生の「自序」(『校補』巻一)の中にみえています。

抑々同源の板本を推定するは、一見甚だ易きに似て実は然らず。一一之を校して始めて其の同源たるを知る。

又同源の板本と雖も、刻する者の、意を以て改むる者無きを保せず(無いとは保障できない)。是に於いて余、尨雜を顧みず、同源の板本を以て姑く比較し、博く諸本の異同を採りて、以て学者の採択するを俟つ。(原文は漢文。カッコ内は筆者)

つまり、(1) に対しては、系統を同じくするテキストでも復刻者が臆改しているところもある(たとえば、わが国にのみ伝わる南宋慶元本とその復刻である百衲本とを対

校してみると校改しているところが多い。『校補』参照(筆者)ので、繁雑であつてもその全容の開示は必要であるというのが先生の立場であり、(2) の批判も先生の真意を斟酌したものとは言えないように思います。かつて先生が「京都の先生から『校補』には『校』があつて『勘』がないと言われたよ」と仰言つていたのを思い出しますが、先生の真意は、自己の臆断を極力避けて、是非の判断を研究者の見識に委ねることが最善だと考えられたのではないのでしょうか。右の「自序」にみられる「博く採りて異同を以て俟つ学者採択す焉」の一文はそのことを端的に表しているように思われます。

そこで想い出されるのは、昭和三十八・九年の頃だったでしょうか、牛島徳次先生が、後に『漢語文法論(古代編)』として結実する下原稿を大学院の講義にかけられました。資料は史記を主とし、漢書を補助的に使つておられました。先生は講義の中で「史記には水澤君の『校補』があるから、本当に有難い」としばしば述懐されていたのを覚えています。多くの用例から帰納的に文法を論じる記述文法の方法論をとられていた先生にとって、適切な用例の選定に『校補』は不可欠のものだったのでしよう。昭和四十二年に刊行され、先生の学位論文ともなった『漢語文

法論(古代編)の「緒論」にも、

他のほとんどすべての古い文献同様、史記も伝本、異本が少なくなく、これを研究資料として用いるには、その「底本」の選定と本文校訂とが大きな障害となつては、幸い滝川亀太郎氏の『史記会注考証』、さらには水澤利忠氏の『史記会注考証校補』が刊行された現在では、この問題はさほど考慮する必要はなくなつたと考えられる。

と記されています。まさに水澤先生の意を得た『校補』の活用と言えるのではないのでしょうか。

*

*

*

少し話がそれましたが、最後に、中国の史記研究において先生の『校補』が活用されている例を一つ紹介して稿を終わりたいと思います。

司馬遷の生年について今日二つの説があるのは周知のところ。一つは王国維の景帝中五年(前一四五)説で、『太史公自序』の「五年^{ニシテ}而当^ル太初元年^ニ」に付された『正義』注「遷年四十二歳」に依拠するもので、太初元年(前一〇四)から四十二年を逆算して、前一四五年を生年とするものです。

今一つは、郭沫若らの武帝の建元六年(前一三五)説

で、同じく自序の「談」卒^{シテ}三歳^{ニシテ}而遷^為太史公^ト」に付された『索隱』注「博物志、太史令茂陵顯武里、大夫司馬遷、年二十八、(元封)三年六月乙卯、除^{セラル}六万石^ニ」に依拠し、元封三年(前一〇八)から二十八年を逆算して、前一三五年を生年とするものです。

この二つの説には、十年の開きがあり、従来さまざまに論じられてきましたが、今日では(一)の説に収斂されているようです。現代の中国の著名な史記学者張大可氏も(一)説を支持する一人ですが、自説を補強するために、該所の『索隱』についての『校補』の校記「二南化三」を援用して、次のように論じています。

漢唐時代の数字の記載は、「二十」を「廿」に作り、「三十」を「卅」に作つたため、両者は混じやすい。日本人の『史記会注考証校補』が引く日本の古本南化本では、『索隱』の「二十八」を「三十八」に作っている。

このことは、『索隱』と『正義』の引拠が同源で、本来一致していたものが、流传するうちに、『索隱』の「三十八」が「二十八」に誤つたことを証するに足るものである(『史記新注』付録「司馬遷の系年」)。

こうした『校補』の活用は、今後日中両国でますますその進展が期待されるのですが、残念なのは先述の『考證』

『校補』合冊影印の際、先生の論文「史記之文献学的研究」が日本語ということで割愛されたことです。もしもこの論文が中国の学者たちに読まれていたら、日本の史記研究に対する評価はますます高まるに違いないと思うからです。

*

*

*

かつて『梁山泊』に屯ろして先生のお仕事を中心になつて支えた先輩の一人は、大学院の課程を終えると、結婚したばかりの新妻を伴つて北海道の新設された大学に赴任し、その僅か数か月後に輪禍に遇つて殉職されました。

『校補』完成後も、『史記桃源抄の研究』の校定に尽力された今一人の先輩も、一昨年病を得てこの世を去りました。学部・大学院の六年間、共に励まし合いながら『校補』の仕事に従事した畏友とも、昨年幽明を異にしました。そして、この度の先生とお訣れです。私の想い出の中の青春時代に幕が降ろされたようで、万感胸に迫るものがあります。今は先生ご付託の新釈漢文大系『史記』列伝の訳業を一日も早く完成させて、先生のご霊前に供えたいと願うばかりです。

先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

* 本稿脱稿後、文教大学の阿川修三氏から、二〇一三年刊行の『点校本史記修訂本』（中華書局）で、『考證』『校補』が重要な

校訂資料として用いられている、とのご指教をいただいた。その実態について、後日、改めて考察してみたい。